

越中愛本橋はいつから奇橋と呼ばれるようになったのか

Since when has Aimoto Bridge been called a Unique Bridge?

貴堂 巖¹

¹正会員 (株)ケイエステック (〒930-0293 富山県中新川郡立山町鉾木220)
E-mail:kido9126@pc.ctt.ne.jp

Abstract

Aimoto Bridge, whose existence has been known throughout Japan since the Edo period, has been introduced in travel books, guides to scenic beauty spots and ukiyo-e woodblock prints as a unique bridge and a bridge of spectacular and superior technology. There are more than five bridges in Japan that are called unique bridges. Together with Kintai Bridge and Saruhashi Bridge, Aimoto Bridge is also sometimes counted among Japan's Three Unique Bridges, but the names of these three bridges differ from person to person and from region to region. In this paper, I examine since when Aimoto Bridge has been called a unique bridge.

Key Words : Aimoto bridge, unique bridge, Saruhashi bridge, Kintai bridge

1. はじめに

(1) 「奇橋」とは

a) 「奇」とは

「奇」の本義は、「人が一本足で立つ」とする説がある¹⁾。ここから、①ことなること、②めずらしきこと、③あやしきこと、④ふしぎ、⑤はんのかず という意義が生れている²⁾。また、字の形が大きな曲刀を使って神に祈る普通でないことを表すので、「ことなる、あやしい」の意味になり、普通よりも「すぐれる、ぬきんでる」の意味ともなる³⁾。このことから、「奇橋」とは構造上、巧みな技術を駆使した構造で、景観も優れている橋を表現していると考えられる。

b) 奇橋と称された橋

江戸時代から近代に至る文献において、「奇橋」と称された橋を整理すると表-1のようになる。構造形式、架橋位置等が変わりのないものがあれば、橋名は残っているが、愛本橋のように近代になり架橋位置、構造が変わったもの、木曾栈橋のように存在しないものもある。

(2) 研究の目的

本稿は、1662(寛文2)年に架けられた⁴⁾愛本橋が「奇橋」と称された時期を文献から明らかにしようとするものである。これまで紀行文、名勝案内等で広く紹介されてきた「奇橋」と称された橋は、その呼称の概念・定

義が整理されて現代まで語り継がれたものではないであろう。次いで「奇橋」と称された橋梁のうち、「三奇橋」に愛本橋を数えた場合と外された場合の状況を明らかにしようとするものである。なお、各古橋の由緒、建設年や橋長、幅員、構造等の諸元については割愛する。

2. 愛本橋が「奇橋」と表現されるまで

(1) 愛本橋を奇橋と呼称した文献

江戸時代から明治時代初期にかけ愛本橋を訪れた多くの人々に称賛され、紀行文に書き残された。これら文人のうち、俳人で全国を行脚した大淀三千風により「大奇栈」と称されたが、本稿では「栈」は「棚」と同義であるので「奇栈」は「奇橋」と同義語として使用されている。

表-1 「奇橋」と称された橋

橋名	形式	所在地	河川名
神橋	刎橋	栃木県	大谷川
愛本橋	刎橋	富山県	黒部川
水内橋	刎橋	長野県	犀川
九十九橋	桁橋+石橋	福井県	足羽川
猿橋	刎橋	山梨県	桂川
木曾栈橋	栈橋	長野県	木曾川
錦帯橋	5連アーチ	山口県	錦川
祖谷蔓橋	吊橋	徳島県	祖谷川

でも用語としては相違した表現と考える。このように考えると愛本橋は、明治時代初期まで、多くの紀行文、日記等に記されているが「奇橋」という表現は見られない。

そのことを示す江戸時代から明治まで愛本橋を紹介した文献を表-2に示す。この他、江戸中期から明治初期にかけての紀行文・地誌のうち、俳人樗良の『菊の香集』、澤田宗堅の『東道紀行』、室鳩巢の『鳩巢文集』、池大雅の『三岳紀行』、大郷良則の『遊覧勝記』、森田柿園の『越中志微』等にも愛本橋が登場するが、「奇橋」なる表現はない⁹⁾。1888(明治21)年に富山県が小学生向けに発行した『越中地理小誌』¹⁰⁾は、愛本橋を「奇にして巧みな橋」として紹介している。その後、1900(明治33)年に発行された『越中名勝案内』¹¹⁾において愛本橋を「奇橋」と呼んでいる。以降、近くの小川温泉を紹介している1904(明治37)年発行の『小川温泉誌』¹²⁾にも、「さながら甲州の猿橋を見るが如く、両越街道中、もっとも有名な奇橋なりしと云ふ」とある。

このことから、紀行文・地誌・名勝案内等の文献では

越中の愛本橋を「奇橋」と呼称したのは、1890(明治30)年以降だったのではないかと推量される。

(2) 地元新聞の愛本橋に対する認識

1890(明治23)年5月9日、富山県報に刳橋から木造拱橋に架換えるため、旧橋の撤去、橋台、上部工に使用される杉、槻木材の購入等6件の工事にかかる入札が公告され、工事は翌年完成した。1891(明治24)年9月24日の地元新聞、「北陸政論」には、刳橋に代わり、高田雪太郎、桑山技手の設計による新しい愛本橋が同年10月1日から供用されることを報じている。そして、旧橋(刳橋)の建設の由来、過去の6回の架け替え工事経歴と新しい橋の工事費などを記述しているが、消滅した旧橋の刳橋を「奇橋」として評価し、取り壊されたことを惜しむ記述は全く無い。続いて、翌年の1892年の春、愛本橋が架け換えられたことを記念して碑文が建てられた。碑文(撰文者不明)には、「(前略)加賀藩主、中納言前田公利常、命工鳩材、作橋梁以通不通、自是愛本飛橋之名

表-2 愛本橋を記述した紀行文・地誌・名勝案内

訪問/発行年	資料名	作 者	愛本橋の表現内容
1688-1703(元禄期)	江戸から金沢までの道の記 ⁹⁾	作者不詳	「両方石山へノはネ橋也。…木曾ノ梯もコレニハ中々難及」
1683(天和3)	日本行脚文集 ⁹⁾	大淀三千風	「合本の刳橋は日本第一の奇棧」
1704(宝永元)	越路紀行 ⁹⁾	磯一峰	「梯ごとごとしく支度して東路の猿橋などに似たり」
1720(享保5)	庚子享保東武使役志 ⁹⁾	民部直方	「相本の橋にて遠見し」
1770(明和7)	北越紀行 ⁹⁾	加舎白雄	「相本の巨流に望む刳橋」
1775(安永4)	乙未の春旅 ⁹⁾	高山彦九郎	「此の橋はくみ出しにて」
1785(天明5)	東遊記 ⁹⁾	橋南谿	「高くして奇なるは越中の相本のはしなり」
1806(文化3)	譚海 ¹⁰⁾	津村正恭	「此のはし左右よりもち出てかけはじめ、中央にてあふようにかけたるはしなり」
1812(文化9)	文化壬申紀行 ⁹⁾	石崎右近	「相本橋向ひに少々家あり」
1815(文化12)	日本九峯修行日記 ⁹⁾	野田泉光院	「谷川故にはね上げ橋なり」
1821(文政4)	東順紀行 ⁹⁾	錢屋五兵衛	「はね橋峨々たる山頭に…」
1823(文政6)	三の山廻 ⁹⁾	尾張藩士某	「刳橋の日本一也」
1828(文政11)	諸国道中金能草鞋十八 ¹¹⁾	十辺舎一九	「泊と三日市の間に相本の橋とて珍しき梯あり」
1835(天保6)以降	越の海つと ¹⁰⁾	作者不詳	「名にしおふかけ橋はねわたりたり、奇代の壯観也」
1840(天保11)	五ヶ山大牧入湯道之記 ¹⁰⁾	作者不詳	「刳木ノ上ハ柱立、棧橋ニテ組上タル大棧橋也」
1842(天保13)	心響雜記 ¹²⁾	田中屋権右衛門	橋上、橋下から構造を描写している。
1884(明治17)	越中地理小誌	富山県編	「一大飛橋を懸け其構造奇且巧まして」
1885(明治18)	越中遊覧志 ¹³⁾	竹中邦香	「世に名高き愛本の飛び橋」
1894(明治27)	越中地理問答 ¹⁰⁾	高柳精一編	「飛橋ニシテ其構造甚ダ巧ミナル」
1900(明治33)	越中名勝案内	富山県編	「愛本に奇橋あり」
1904(明治37)	小川温泉誌	伊藤祐賢編	「甲州の猿橋を観るが如く両越街道中もっとも有名な奇橋なりし」
1913(大正2)	北陸線案内 ¹⁴⁾	中部鉄道管理局編	「橋上の眺望絶景にして」
1922(大正11)	黒部遊覧 ¹⁶⁾	富山県下新川郡役所編	「往時日本三奇橋の一と称され」
1928(昭和3)	黒部峡谷 ¹⁷⁾	吉沢庄作	「往時刳橋にして日本三奇勝一と称された」

興焉(後略)」と記述された¹⁸⁾。このときも、「奇橋」と称されていたとは書かれていない。紀行文に出てくる「飛橋」と表現されており、「奇橋」としての価値が評価されていない。このことから「奇橋」なる呼称は、この地方では、まだ一般的ではなかったと考えられる。したがって、愛本橋に限って言えば、越中では江戸時代から明治時代中頃まで「奇栈」、「奇にして巧み」、「奇覧」、「飛橋」などと称されていたが「奇橋」と呼ばれたことはないようである。

3. 愛本橋以外に「奇橋」とされた古橋

それでは、表-1の愛本橋以外の各橋梁は、江戸時代や明治時代前半には、どのように呼称されていたのだろうか。

序文が1795(寛政7)年とある『東遊記 卷之二』の九十九橋の項では「石と木を続合せたる橋は珍しき橋也」と紹介している。この項では、各地の橋を紹介し「橋の巧みをつくして奇妙なるは、周防の岩国の錦帯橋也…危きは甲州の猿橋、高くて奇なるは越中の相本の橋なり…」と記述している¹⁹⁾。

明治に入り1883(明治16)年発行の教科書、『小学作文全書 卷之九上』記事文之部錦帯橋の項に用語「奇橋」が使われている。その後、国内の名勝を紹介した野崎城編輯の1894～1895(明治27～28)年にシリーズとして発行された『日本名勝地誌』第4編から第7編²⁰⁾にあらわれた古橋の表現を整理すると

- ・九十九橋「半ば石造半ば木造にして最も奇工と称す」
- ・木曾の栈橋「両端に岩石を壘みて橋礎となし之に長さ56間幅3間4尺の木橋を架せしめ…」
- ・久米路の橋(水内橋)「…橋上曲折して曲尺の手を為す故に曲橋の名ある乎」
- ・神橋(山菅の橋)「石柱を河中の巨岩より建てて橋を支え欄干、橋板共に朱塗にして…」

いずれも「奇橋」なる用語は使用されていない。また、同時期に発行の『古跡遊覧四国名所誌』²¹⁾に登場する祖谷の蔓橋の紹介でも「奇橋」なる扱いはされていない。

その他、1900(明治33)年に出版された全国約140箇所の名所を紹介している『地理歴史勝地記文』²²⁾では橋は、ただ一つ錦帯橋を紹介して、技術の巧みさを絶賛しているが「奇橋」という表現は使われていない。

同年に、掲載している名勝地はすべて写真が添えている『日本之名勝』²³⁾が発行され、数多くの

表-3 猿橋を紹介している文献

発行年	資料名	表現・内容
1892(M25)	小学校用甲斐国地誌 ²⁴⁾	架設の起源、規模
1895(M28)	山梨鑑 ²⁵⁾	架設の起源、規模
1903(M36)	甲斐繁昌記 ²⁶⁾	架設の起源、規模
1903(M36)	日本漫遊案内(上巻) ²⁷⁾	猿橋を日本三奇橋の一つとして紹介しているが、木曾の栈を「絶景」、錦帯橋は「奇功を以て古来名高し」と評しているだけで、他の2橋はどの橋かを示していない。
1906(M39)	甲州案内 ²⁸⁾	猿橋を日本三奇橋の一つと紹介。他の2橋はどこか記述されていない。
1910(M43)	新選名勝地誌卷之二 ²⁹⁾	同上
1912(T1)	甲州見聞記 ³⁰⁾	「日本三奇橋の一つ」
1915(T4)	山より水へ ³¹⁾	(1907年に訪問)「所謂名橋」

表-4 錦帯橋を紹介している文献

発行年	資料名	表現・内容
1883(M16)	小学作文全書 卷之九上 ³²⁾	「架スルニ奇橋ヲ以テス」
1893(M26)	家庭教育日本地理旅行談 ³³⁾	「錦帯橋ノ奇観」
1893(M26)	防長歴史談 ³⁴⁾	「その奇巧を驚かざるは無し」
1894(M27)	錦帯橋事蹟略 ³⁵⁾	10数人の文人歌人の詩歌を採録しているが「奇橋」は無い
1895(M28)	日本名勝地誌 第6編 ³⁶⁾	「最も構造の奇功と堅牢を以て名あるもの」
1895(M28)	新案帝国地図 中等教科 ³⁷⁾	「錦帯橋ノ奇観」
1898(M31)	日本名勝記下巻 ³⁸⁾	「川に架せる奇橋あり」
1900(M33)	地理歴史勝地記文 ³⁹⁾	「其奇功ナルヲ聞クコト久シ」
1900(M33)	中等小地理 ⁴⁰⁾	「構造甚だ奇にして」

橋梁が紹介されている。当然、木曾の栈、神橋、猿橋、錦帯橋が掲載されているが「奇橋」の表現は無い。

ここで猿橋と錦帯橋について記述のある明治時代の文献を表-3, 4に示す。

これらの表から判るように猿橋、錦帯橋に対しても「奇橋」と表現されるのは、1880年頃を過ぎてからである。

以上の状況から、江戸時代から明治時代中頃までは、愛本橋以外でも「奇橋」なる呼称は使用されていなかった可能性がある。昭和に入ると、横山健堂の『錦帯橋国風景記』によれば、「三奇橋」の名称は錦帯橋架設以降のことで、二百年来の題目であることは疑いない。(中略)橋脚がないことが三奇橋の基本概念である」と述べている⁴¹⁾が、「奇功なる橋」を「奇橋」と同義語としてとらえ、支間が大きいことを「奇橋」の条件としているようである。

4. 愛本橋の三奇橋としての評価

(1) 「三」のもつ意義

古来、数々ある山々、景勝地、行事等から優れているものを指す場合、「三」にこだわり、「日本三名山」、「日本三景」、「日本三公園」、「京都三大祭」、「東北三大祭」等のように「三」に絞り込み、お国自慢の種として、他と差別化することが多い。

ここで、奇功なる橋、三橋または、「三奇橋」について記述している書誌と、そこに挙げられた橋名を表-5 示す。これらの中には、必ずしも橋梁に詳しいわけではなく、伝聞として知っていると

して三橋の名を挙げている作者もいる。

表-5 から判るように「三奇橋」なる言葉は、明治時代後半から目に触れるようになるが、資料の該当箇所を読む限り、明確に「奇橋」の定義をしたうえでの選定とは考えられない。すなわち「三奇橋」と称する橋名を挙げているものの、その選定理由を明確に説明している者は少ない。

極端な例になるが、横山健堂は、1916(大正 5)年発行の『快心録』⁴²⁾では、猿橋、錦帯橋、木曾の懸橋を「三奇橋」として言いきっているが、20 年後に執筆した『錦帯橋国風景記』では、猿橋、錦帯橋を上げた後、愛本橋と九十九橋を候補に挙げながら歯切れが悪く、橋脚が無いことを「奇橋」の条件として、新しく建設された福岡県の河内貯水池の魚形橋(南河内橋)を推薦している⁴³⁾。

(2) 愛本橋の「奇橋」としての古人の評価

愛本橋は甲斐の猿橋と同じ刎橋構造であり、規模としては猿橋よりさらに大きく「此橋日本第一の大栈橋なり」とうたわれた⁴⁴⁾。しかし、猿橋の方が早く建設されたことや、黒部川が著名でなかった昔は、江戸に近い猿橋が有名で、訪れる人も多く愛本橋より知名度が高かったから猿橋が選ばれたという説がある⁴⁵⁾。

そのため、「三奇橋」を上げる場合、周防の錦

表-5 奇巧なる三橋または三奇橋名を紹介している文献

発行年	資料名	愛本橋	水内橋	九十九橋	猿橋	木曾栈橋	錦帯橋	祖谷蔓橋	その他
1755(宝暦5)	石川夷康「猿橋碑」『山梨鑑』p. 68 所収 *注)				○	○	○		
1814(文化11)	松平定能『甲斐国志』, 古事類苑地部三十九橋下 p. 283 所収 *注)				○	○	○		
1904(M37)	野沢潤『千景万色記事紀行文』 ⁴⁶⁾	○			○		○		
1912(T1)	松崎天民『甲州見聞記』				○	○	○		
1916(T5)	横山健堂『快心録』				○	○	○	□	
1926(S1)	松川二郎『科学より見たる趣味の旅』 ⁴⁷⁾	○			○		○		
1928(S3)	坂本栄吉『日本見物』 ⁴⁸⁾	○			○		○		
1929(S4)	(社)工学会『明治工業史 土木編』 ⁴⁹⁾	□			○	○	○		
1929(S4)	畑中健三『名橋巡り』 ⁵⁰⁾	□	□		○	○	○	(危橋)	
1936(S11)	(社)土木学会『日本土木史 明治以前』 ⁵¹⁾				○	○	○		
1936(S11)	横山健堂『錦帯橋国風景記』	□		□	○		○		魚形橋
1939(S14)	保田與重郎『日本の橋』 ⁵²⁾				○	○	○		
1943(S18)	成瀬勝武『新訂橋』 ⁵³⁾	□	□		○	○	○		
1984(S59)	平凡社『大百科事典』	○			○		○		

*注) 奇橋とは表現していない。「奇巧」としている。 ○印: 三奇橋として紹介 □印: 奇橋と紹介している橋

帯橋と甲斐の猿橋の二つの名をまず挙げ、次に、木曽の棧や祖谷の蔓橋と並んで愛本橋が評価されている。ただ、棧は険しい崖に沿って板を懸け渡した橋で特色が無いとして木曽の棧が「三奇橋」から外される例もある⁵⁴⁾。

1904(明治 37)年に、野沢潤が「三奇橋」の一つに愛本橋を選んでいるのが注目される。彼は「幼いとき地誌をひもとき、猿橋、錦帯橋、愛本橋を日本の「三奇橋」という章句を読んだので三橋を実地に臨んだ」と記している。明治の中頃には、愛本橋を「奇橋」と呼び、また、「三奇橋」の一つと記述した文書が存在したと思われる。愛本の刎橋は、その構造の巧みさとともに、橋上から観る黒部川の圧倒的な眺めの凄さが評価されている。名勝地として評価されることが多い愛本橋であるが、架設された黒部川の河況を考えると、北陸道の越後と越中を結ぶ重要な要害の地に設置されており、また、夏季の渡河の難しさを考慮すれば、その架橋の難度と交通上の重要性も加味して評価されるべきであろう。

5. まとめ

愛本橋は古くから「奇橋」と呼ばれ、越中においては、日本の「三奇橋」の一つに数えられてきたと伝えられてきた。しかし、愛本橋に対して「奇橋」という表現が使われたのは、そんなに古い時代からではなく、明治中頃からだったと推量した。

また、「奇橋」なる言葉が使用されている最初の文献は 1883 年発行の『小学作文全書 卷之九上』であり、次いで 1898 年に発行された遅塚金太郎著『日本名勝記 下巻』であった。また、「三奇橋」なる用語を最初に使用している文献は、1903 年発行の坪谷善四郎著『日本漫遊案内 上巻』であった。そして愛本橋より木曽棧橋が「三奇橋」の一つに数えられることが多かった。

本稿は江戸時代と明治初期の橋梁に関するすべての文書、名勝案内、旅行記の史料を調べ尽したわけではない。しかし、江戸時代に愛本橋を訪れ、名勝案内や紀行文を書き記した、当時としての教養人達が「奇橋」なる用語を使用しなかったのは、ほぼ間違いのない事実ではないだろうか。

ところを変え、甲斐国周辺、周防国周辺においても、猿橋や錦帯橋に対して、明治時代に入るまで「奇橋」という用語が使用されていなかったのではないかと推察される。また、福沢諭吉のように 1855(安政 2)年に長崎から上方への道中、錦帯橋を訪れながら、「(前略)其前に岩国の錦帯橋も余儀なく見物して(後略)」⁵⁵⁾と錦帯橋の評価に全

くふれず無関心と思われる訪問者もいた。

江戸末期から明治時代にかけては、土地を取り上げる用語を「土地」から「土地収用」に、物見遊山の「遊覧」から国の光を観る「観光」へと新しい言葉が生まれた。また、1873(明治 6)年の太政官布告第 16 号「人民輻輳ノ地ニ公園ヲ設ルヲ以テ地所ヲ選択凜候セシム」により「公園」の呼称が普及し、数多くの城址の庭園のなかから「日本三景」に習い「日本三公園」なるものが生まれた時代でもあった⁵⁶⁾。「奇橋」なる用語が生まれたきっかけと命名者は不明であるが、越中の人々は、愛本橋をすぐれた技巧で珍しい構造形式の「奇功なる橋」を「奇橋」という新しい言葉で讃え、お国自慢から日本の「三奇橋」に値すると評価したのであろう。

しかし、「奇観」や「奇功」の言葉本来の意義について考えると、「奇観」は、「めづらしきさま」、「かはりたる見もの」であり、「奇功」は「ふしぎなる功績」、「すぐれたるいさを」である⁵⁷⁾。この形容詞を橋名の冠にすることにより、橋の景観、卓絶した架橋技術が高く評価されていることが人々に理解されていた。ところが「あやしい」、「ふしぎ」、「すぐれた」等、多様な意味を含む「奇」なる頭の漢字だけを「橋」に付けて「奇橋」なる用語を使用したことにより、本来評価していた各々の橋梁の価値があいまいになったのではないだろうか。このままでは「strange bridge (奇妙なはし)」となりかねないと思う。したがって今後の課題として、古人が「奇橋」と称した評価の基準を確認し、「奇橋」の意義を整理しておく必要を感じる。

参考文献および補注

- 1) 加藤常賢:漢字の起源、角川書店、1967。
- 2) 金沢正三:廣辞林、三省堂、1925。
- 3) 白川静:常用字解、平凡社、2012。
- 4) 野島好二:愛本橋の今昔、富山史壇第 40 号、富山史壇会、p. 9、1968。
- 5) これら文献は、宇奈月町史追録編纂委員会編:追録宇奈月町史 歴史編、p. 151-152、1989 に所収。
- 6) 富山県学務課編:越中地理小誌、大橋甚吾、6 丁、1871。
- 7) 富山県内務部編:越中名勝案内、中田書店、p. 57、1900。
- 8) 伊藤祐賢編:小川温泉誌、p. 26、1904。
- 9) 紀行文は、橋本竜也編:越中紀行文集(越中史料集成)、桂書房、1994. に所収。
- 10) 津村正恭:譚海、(1806)、図書刊行会、p. 105、1917。
- 11) 十辺舎一九:諸国道中金能草鞋 十八、p. 10、1828。

- 12) 児島清文他編：応響雜記(上)越中資料集成 7, 桂書房, p. 954, 1988.
- 13) 竹中邦香, 広瀬誠校訂：越中遊覧志, 言叢社, p. 91, 1983.
- 14) 高柳精一編：越中地理問答, 聚星堂, p. 6, 1894.
- 15) 中部鉄道管理局：北陸線案内, p. 5, 1913.
- 16) 富山県下新川郡役所：黒部遊覧, p. 5, 1922.
- 17) 吉沢庄作：黒部峡谷, 黒部鉄道(株), 1928.
- 18) 「北陸政論」, 1892年4月8日.
- 19) 1900年に博文館発行の『紀行文集成』を底本とした, 大橋乙羽校訂：日本紀行文集成 第2巻, 日本図書センター, pp. 31-33, 2002.
- 20) 野崎城編輯：日本名勝地誌, 博文館, 1895.
- 21) 得能道義編：古跡遊覧四国名所誌, 得能道義, pp. 252-253, 1895.
- 22) 富本 温：地理歴史勝地記文, 又間精華堂 pp.253-254, 1900.
- 23) 瀬川光行：日本之名勝, 史伝編輯所, 1900.
- 24) 吉田時編：小学校用甲斐国地誌, 積水同窓会, 22丁, 1892.
- 25) 小幡宗海・安藤誠治編：山梨鑑, 山梨鑑事務所, p. 68, 1895.
- 26) 佐野道正編：甲斐繁盛記, 甲斐繁盛記編輯所, p. 42, 1903.
- 27) 坪谷善四郎：日本漫遊案内 上巻, 博文館, p. 881, 1903.
- 28) 山梨時報社編：甲州案内, p. 52, 1906.
- 29) 田山花袋編：新撰名勝地誌 卷之二, 博文館, p. 376, 1910.
- 30) 松崎天民：甲州見聞記, 磯部甲陽堂, p. 206, 1912.
- 31) 佐藤北峰：山より水へ, 青年評論社, p. 53, 1915.
- 32) 文学社編輯：小学作文全集 卷之九上, 文学社, p. 4, 1883.
- 33) 神保孝慶：家庭教育日本地理旅行談, 文陽堂・博文堂, 附録 p. 10, 1893.
- 34) 宮崎勇熊編：防長歴史談, 宮崎勇熊, p. 33, 1893.
- 35) 河上忠：『錦帯橋事蹟略』, 河上忠, 1894.
- 36) 野崎城編輯：日本名勝地誌 第6編, 博文館, p. 303, 1895.
- 37) 東京地図調製所編：新案帝国地図 中等教科, 杉本書房, p. 33, 1895.
- 38) 遅塚金太郎：日本名勝記 下巻, 春陽堂, 146, 1898.
- 39) 富本温：地理歴史勝地記文, 又間精華堂, p. 253, 1900.
- 40) 文学社編輯所編：中等小地理 本邦之部, 文学社, p. 114, 1900.
- 41) 横山健堂：錦帯橋風景記, 岩国町役場, p. 74, 1936.
- 42) 横山健堂：快心録, 日東堂, p. 316, 1916.
- 43) 前掲41), pp. 79, 1936.
- 44) 土屋義休：加越能大路水経, 1714(正徳4), 宇奈月町町史編纂委員会編：宇奈月町史, p. 601, 1969に所収されている.
- 45) 前掲41), p. 75, 1936.
- 46) 野沢潤：千景万色記事紀行文, 偉業館, p. 156, 1904.
- 47) 松川二郎：科学より見たる趣味の旅行, 有精堂 書店, p. 92, 1926.
- 48) 坂本栄吉：少年智囊 日本見物, 日本少年少女文庫刊行会, p. 92, 1928.
- 49) (社)工学会：明治工業史 土木編, (開)啓名会, p. 11, 1929.
- 50) 畑中健三：名橋巡り, 太陽堂, p. 49, 1929.
- 51) (社)土木学会：日本土木史 明治以前, 1112, 1936.
- 52) 保田與重郎：日本の橋, 角川書店, p. 76, 1939.
- 53) 成瀬勝武：新訂橋, 河出書房, p. 18, 1943.
- 54) 平凡社：大百科事典 6, p. 442, 1985. (執筆：伊藤学)
- 55) 福沢諭吉：福沢諭吉全集 第7巻, 岩波書店, p. 30, 1959.
- 56) 文学社編輯所編：中等小地理本邦之部, 文学社, pp. 112-113. 1900には, 岡山にて「この地の公園は本邦三公園の一つたり」, また「日本三景の一なる安芸の厳島」とある. 錦帯橋は「其構造甚だ奇にして」とある.
- 57) 金沢庄三：廣辞林新訂版, 三省堂, 1937.

(2013. 4. 5 受付)